

## *Common European Framework of Reference for Languages (CEFR)* と異文化間能力について

姫田 麻利子

CEFR (『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』) において、異文化間能力に関する十分な認知がされていない理由および、異文化間能力の中でも特に「異文化間の気づき (Intercultural awareness/Prise de conscience interculturelle)」に対する外国語教育の責任を実体化するための方法論について述べた。

はじめに CEFR 開発の経緯、目的、理論的基盤を簡単に紹介してから、外国語教育における言語と文化の関係の歴史をふりかえり、そのうち CEFR が認めない範囲を確認した。理論的進展に反して CEFR は目標文化の定義を学習者の主観に譲らない。その理由はおそらく、学習者の主観に賭けた後の方法論が未確立なことにある。方法論に関する議論も未熟な段階でコンセンサスを得られる評価基準をうち出せるわけではなく、ということは「異文化間の気づき」は評価基準共通化という CEFR 本来の目的を叶えない理論に他ならず、またこの段階で主観性を認めれば、現場にはかえって文化アプローチの無気力を招きかねない。だから、理論上の進展を現場に活かし次の展開を得るためには、目標文化に対する主観を学習者が自省し、かつその変化を証明する教材が必要と考える。発表の終わりに、現在私がフランス語学習者を対象に試用実験中の教材を見てもらった。

発表のあと、CEFR の理念である複言語主義と多言語主義のちがいを、外国語教育における文化概念の拡大と文化境界の流動性の理論的背景等について、会場からご質問、ご意見を頂いた。開発教材の他言語学習者への汎用可能性に関するご質問が、さいごにあった。折角さまざまな語種の教員が集まっていただいたのだし、こうした質問をきっかけに興味深い意見交換が展開するように、発表の運びを工夫すればよかった。学内研究発表会というのは同僚間の相互理解の

ためにとってもいい機会とを感じる一方、研究発表の場としては（会場の親しい顔に油断するけれど）アウェイだ。ふだん *CEFR* の象徴的権威性を前提とした議論の場にいるから、*CEFR* の問題点指摘に慎重になっていて、本発表でもその部分に時間を割きすぎたところがあった。「異文化間の気づき」の定義と開発中の教材説明をもっと丁寧に話すべきだったかもしれない。